

2020年度(令和2年度)十日町幼稚園自己評価

1、園の保育目標

キリスト教精神により愛と平和と人権を大切にした保育

1. キリスト教保育
2. 一人ひとりの育ちを大切にする保育
3. 生命の輝きを知る保育

大人の都合や価値観が優先され、これが良い教育だと錯覚されることが多い中、「遊ぶこと、甘えること、愛されること」など、本来子どもが最も必要としていることを大切にしています。今受ける愛が人生の輝きの源になる、これが私たちの保育です。

2、本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画をもとに設定した園の評価の具体的な目標や計画

- ①子どもたちが安心して幼稚園での生活を送るようにする。
- ②礼拝や誕生会や日々の生活を通して、自己肯定感(自尊感情)を身につける。
- ③子ども自身が遊びや生きた体験学習を通して自発性・自主性を高める。
- ④ケンカなどのぶつかり合いや日々の生活を通して、友だちを尊敬し、周りの人に感謝することによって協調性(思いやり)を育てる。
- ⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育する。
- ⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営していく。
- ⑦日々の生活を通して、子どもと保育者、保護者と保育者が信頼関係で結ばれること。
- ⑧食事への意欲を養い、共に食卓を囲む喜びを体験する。
- ⑨地域社会の中の保育園として、地域に開かれた保育園として地域住民との交流をより促進する。

3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	現 状 分 析
①子どもたちが安心して生活し、いきいきしているか。	保育士が子どもの気持ちに寄り添い、受容的・応答的態度で接することで子どもたちにとって園は安心して過ごすことのできる場所になっている。睡眠時間が少なく朝食を食べてこない子どもは午前中の活動に支障がある場面もあり、個別に対応している。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育っているか	ありのままの子どもの姿を受け入れることを大切にしており、家庭でも園でも気持ちが満たされている子どもに関しては自己肯定感が育ち安定している。一方で気持ちが、特に家庭で満たされていない場合、承認欲求が強く保育者にべったりとなり、気持ちの切り替えに時間がかかることも多い。
③子どもたちの遊びを通して自発性・自主性を発揮し、また保育者が子どもたちにとってよき援助者となりえているか	子どもたちが自分の興味や関心をもった遊びに意欲的に取り組むために環境を整えること、日々の保育が計画され、子どもが自分の思いを尊重される保育が実行されてきたと思う。しかし主体的な保育に取り組む中で保育者の迷いが感じられる場面もあったことを踏まえると、保育者の意図的な関わりという課題はあると思われる。
④子どもたちが日々の関わり合いの中で、互いを思いやる心が育っているか	小規模園ゆえ、異年齢の交流が多くあり、泣いている年下の子を労わり、慰めようとする姿がよく見られる。またキリスト教主義の園独自の祈りする習慣があるが、他者のために祈りをささげることで思いやりの気持ちが育っている。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育しているか	保育所保育指針に基づいて、各年齢に応じた保育をより一層心がけている。未満児クラスは個人差、月齢差もあり、個々の育ちに見通しをもちながら過ごすことができた。以上児も個から集団への活動の変化に適應できている。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営しているか	日々の保育の中で、保育者だけではなく子どもに関わるスタッフが、報告・連絡・相談を通して、子どもたちにより良いかわりができるように連携して、保育を展開できた。また職員会議を通して子どもの情報を園全体で共有する事が出来ている（名札がなくても全職員が全園児の名前を把握できている）。特に当園は看護師が2名いる強みを活かして、看護師との連携をより密接にしていこうと園全体で確認している。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれているか	日々の受容的・応答的態度で保育を行い、特に未満児は愛着形成を十分に配慮するため、ゆるやかな担当制を導入し始め、子どもと保育者の信頼関係は構築されていると思う。保護者とも基本的な信頼関係はできていると思うが、意識のズレが生じた時に放置せずより丁寧な声掛けや連絡が必要である。
⑧食事への意欲が育ち、共に食卓を囲む喜びを子どもたちが感じているか	今年度から食事をランチルームでとることで、子ども自身が食べる時間や量を決めるようになって、食べる意欲が増し、食事の時間がより豊かな時間となっている。
⑨地域にある園として地域に開かれ、地域住民とのこうりゆうが図られているか。	地域で一番歴史のある園として地域社会とのかかわりは深いものがあるが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、交流する時間が大幅に減ってしまったことは残念である。

4、評価項目の取組をより深めるために保育者がどのように対応するのか

評価項目		保育者がどのように対応するのか
①子どもたちがいきいきして過ごすために	⇒	子どもが主体的に選び取る保育に取り組むことで、子どもが自分で遊びを選び遊びこめる環境を保証し、子どもの遊びが広がっていくような保育計画と見通しをもった準備が必要。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育つために	⇒	子どもたち一人ひとりの思いに寄り添い、ありのままの子どもの姿を受け入れる。またそれぞれが持っている可能性を信じ引き出していけるような関わりや、自信が持てるような活動を行う。保護者の負担にならないように配慮しつつも、家庭での受容的・応答的態度の重要性を引き続き伝える。
③保育者が子どもたちにとってよき援助者となるために	⇒	子どもたちの今の姿を肯定的な視点で見つめることを土台に、子どもの発達段階を良く理解して、準備して保育に臨み、常に振り返りを行い、試行錯誤を繰り返しながら保育していく。保育者集団がチームとして機能するための共通理解をより深めていく。
④子どもたちの互いを思いやる心を育てるために	⇒	保育士・職員が子どもたち一人一人の良い所に目を向け、一人一人を肯定するまなざしを向け、声掛けをしていく。職員同士や職員が子どもを思いやることで、子どもは思いやりのある人になる。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育するために	⇒	全職員が定期的に各種研修に出席することはもちろん、日々保育所保育指針を見直し、職員会議における学びも継続していく。特に年少以上児については、個々の発達段階を的確に捉えつつ、友だちとの関わりや集団の中での生活を学ぶ。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営するために	⇒	管理職はもちろん、全職員が「やらされる保育」ではなく当事者性をもって働くようにする。常に共に学ぶ姿勢をもつことと、疑問に思うことを放置しないこと、管理職も引き続き肯定的まなざしや態度をもって全職員に接していく。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれるために	⇒	子どもや保護者が「自分は受け入れられている」という実感をもてること。そのためには担任はもちろん、すべての保育者や職員がいつも朝の受け入れやお帰りの際に肯定的な言葉を添えていく。保護者と保育者は子育てのパートナーであることを双方が自覚する関係の構築が必要。
⑧食事への意欲と、共に食卓を囲む喜びを実感するために	⇒	ランチルームの継続、園庭での野菜育てや、地域に開かれた園として青果店への買い物などを継続して行っていく。
⑨地域に開かれ、地域住民と交流を図るために	⇒	新型コロナウイルスの流行が収まった時には、交流を再開したい。

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
職員同士の保育理念の共有をより深く	<p>子どもの主体性を育む保育に取り組む中で、それぞれの保育者によってとらえ方が違っていたり、迷っている部分があるまま放置されることなく、日々の疑問や悩みを打ち明け、より良い保育へ向かっていく。そのためには、職員会議に常時出席していないパート職員の声もよく聴き、同時に職員会議で話し合われたことも、職員会議ノートだけでなく、口頭で共有していくことも必要である。</p>
行事のあり方について	<p>新型コロナウイルス感染症の影響により、様々な行事活動の変更・縮小・中止を余儀なくされた。今まで当たり前に行ってきた行事について、子どもの育ちを考えた時にどうなのか、もち方を昨年度も検討したが、今年度も引き続き行事のより良いありかたを検討していく。</p>
保護者の方への発信	<p>保育所は単なる託児所ではなく、子どもたち一人ひとりを理解し、肯定的に受け止め、そして各児がもっている力を育む場所であることを保護者に理解してもらい、同時に保育所の職員は子どもを育てるパートナーであることを自覚していただくことにより注力したい。おたよりや連絡帳などで子どもの育ちを共有しているが、保護者の方でもかなり細かく反応いただける方と、ほとんど連絡帳に記述の無い方もいる。その場合は、登降園時に意識的に保育者が声掛けをしていき、信頼関係を深めていくことが大切である。また保護者の方と子どもたちとの関係において、アタッチメント（愛着形成）に課題がある場合が引き続き見られる。以上児は絵本の定期購読をしてもらっているため、園でも同じ絵本を読み、その反応を保護者の方に伝えて、ご家庭でも親子が絵本を通じて触れ合いの時間をもてるよう働きかけを行っていく。</p>

